【 大学等・一般の部 】　優秀賞

大自然のエール

埼玉県所沢市　小松崎　有美

幼い頃よく光永寺に行った。ひとりでお寺の裏を歩き、ひとりで一本桜をながめる。学校に行けなかった日にというのが切ないのだが。実を言うと私は長らく不登校だった。朝は起きれず、夜も眠れない。今ならそれが起立性調節障害とされるが当時は医者でもよくわからない。

「学校でいじめにでもあってるの？」

「ちがう」

「じゃあなんで行きたくないの？」

「なんとなく」

毎日がそのくり返し。

やがて学校に行けなくなると親戚の叔父さんが心配してやって来た。

「ちょっと話をしてもいいか」

「え、ええ……」

玄関で母とのやり取りに耳をそばだてる。来るな、と願った。来ないでくれ、と叫びたかった。しかし叔父さんは部屋の前まで来るとたったひと言。

「見せたいものがある」

扉の向こうの私に声をかけた。叔父さんが見せたいもの。それはアルバムだった。そこには光永寺で撮った一本桜が映っていた。樹齢二百年とも言われるしだれ桜。

「実はオレも学校に行けない時期があって。そのとき家のベランダから桜をずっと見てたんだ」

アルバムの桜は春から始まっていた。そして雪の重みに耐える桜まで叔父さんは季節ごとにエピソードを話してくれた。

「これはちょうど入学式の頃。ランドセルを背負った小学生が桜の下を楽しそうに歩いてたっけ」

「夏はここで悪ガキたちが木登りをしててさ。管理人さんに怒られてたのをよくベランダから見てたよ」

「秋は隣町のヤツらが落ち葉をかぶって遊んでてさ。楽しそうだったよ。でも冬になると葉っぱが一枚もなくなってさ。誰も来なくなって寂しかったな……」

季節ごとに記憶をたどる。ベランダから見える景色は決して美しいものではなかった。

それでも皆が帰ったあと叔父さんはこっそり木の下まで来た。できれば俺も。できれば一緒に。そんなことを思いながら叔父さんはこっそり涙を流した。

「でも春になると必ず桜は咲くんだよ。どんなにつらくても人生には必ず春が来る」

まるで人生訓のような言葉。私も少し勇気が出た。以降叔父さんは週末になると私を色んな場所に連れて行ってくれた。春はネモフィラの青いじゅうたん。夏は花公園の 160 万本のヒマワリ。秋は県下最大と言われる西椎屋の大銀杏。冬は鶴見岳の真っ白な銀世界。真っ青なネモフィラからは、やわらかな春の訪れを。まっすぐに伸びるヒマワリからは、生きる強さを。葉が散ったあとのイチョウの木からは自然の儚さを。雪の間から顔を出す芽からはいのちの尊さを。大分の自然は、季節を変え、視点を変え、様々な見せ方で、私を驚愕させ、共感させ、感嘆させた。

おかげで少しずつ学校に行けるようになった。すぐに引き返してしまう日もあったし、校門まで行ける日もあった。学校に行くと見せかけて光永寺で時間をつぶしていたことだって。だけどどんな時も一本桜はそこにあった。不安で押しつぶされそうな日。友達ができなくて下を向いた日。苦しくてどうしようもない日。上を向くチカラをくれたのは一本桜。そこにいる時だけはすべてを忘れられた。学校に行けないのも忘れ、友達がいないのも忘れ。大自然の恵みが私に生きるエネルギーをくれたことは間違いない。

もし私のように不登校で苦しんでいる子がいたら、ぜひ伝えたい。たとえ学校に行けなくても。友達がいなくても。上を向くチカラをくれる存在はいるんだよ。あの一本桜のように。あなたの傍に、きっと。今だって、本当は。私はそう信じている。